

## 第7回ふるさとパンフレット大賞 選考委員講評

### 《選考委員》

委員長：南 伸坊 氏(イラストレーター)

委員：楓 千里 氏(株式会社JTBパブリッシング エグゼクティブ・アドバイザー)

パクン 氏(お笑いコンビ パクンマクン)

マクン 氏(お笑いコンビ パクンマクン)

北村 潤一郎 (一般財団法人地域活性化センター 常務理事)



左から 北村委員、マクン委員、南委員長、パクン委員、楓委員

### 《南 委員長》

#### ◎総括

パンフレットは、まず手に取ってもらわなければ、そこから先の展開はありません。面白そうだったり、キレイだったり、思わずほしくなる要素が必要です。

今年人気があったのは、イラストのインパクトでした。大賞の「豊後高田!あるある本」は関心させたり、感動させたりというよりも元気の良い、オシャベリの、肉声のおもしろさ、という感じ。雑然としているし、全然小綺麗じゃないんだけど、思わず話に引き込まれるナマの魅力があります。最後の見開きに「ちゃんとしたまとめ」が入っているのも微笑ましい。

優秀賞の「アジフライの聖地・長崎松浦」は、まずアジフライに特化したところがお手柄です。写真を使った「プレ宣言書」と「食べ歩きMAP付!」の「宣言書」がセットになっています。この宣言書の方のイラストが独特の魅力のある絵で楽しく見せる工夫が成功しています。

#### ◎個人賞

正方形の紙を対角線状に二つ折りしただけの1枚のパンフレットですが、折ったことによって「明神山」標高 273.6m の「山」のイメージを思わずだけでなく、三角の形状が目を引きます。しかもそれを広げると、ちょうど東西南北に分割して、頂上からの眺望の見取り図の機能も兼ねている。裏側にも写真や「世界遺産ビュー」を楽しむ方法が説明されていて、ただ1枚のリーフレットを十二分に活用しています。そのアイデアが素晴らしい。

## 《楓 委員》

### ◎総評

活字、書き文字、イラストを縦横無尽に使い、これでもか、これでもかと豊後高田の自慢ネタと自虐ネタを織り交ぜている大賞受賞パンフレットには底知れぬ、パワーを感じました。制作者の皆さんが大笑いしながら編集している姿が想像できます。市民の皆さんも面白がって手にされていると思います。豊後高田を知らない方を、一目で惹きつける作戦は十分に成功しているのではないのでしょうか。

イラストと写真表紙の2部方式を上手く使った、優秀賞の松浦アジフライ宣言書も大賞と同じ系統で、手にした人に「これは何？」と疑問と関心を持たせる仕掛けが効いています。真面目な正統派から、ギャグや可笑しさを取り入れたパンフレットがトレンドになっているのかもしれませんが。来年の傾向も楽しみです。

### ◎個人賞

奄美大島市の「SHIMA-JIMAN」(シマジマン)は大賞作品とは違い、島自慢を素直に編集している正統派です。島の伝統行事やお祭りに参加する方を写真ではなく、ご本人に良く似たイラストで表現しているのが特徴。このイラストのおじさん、おばさんの柔らかい笑顔が、紙面から滲み出ている、傍にお邪魔したい、一緒に踊ってみたいとの気持ちにさせてくれます。シマごちそう、シマ商店、歴史、文化、自然を写真やイラストを大胆に使って紙面に変化を付けた雑誌風の作りで、読み応えもあります。本文の文字の小ささが気になりますが、ビジュアル重視であれば納得です。奄美大島を知るための保存版として、長く手元に置いておきたい一冊です。

## 《パクン 委員》

### ◎総評

写真と文章だけで読む人を惹きつける、パンフレットの力はすごい!もちろん、観光促進として「あそこ、行ってみたい」と思わせるのが狙いだが、行ったことがないのに、なんとなく「あそこ、知っている!」、「あそこ、好き!」と思わせる効果もある。今回の大賞の作品は、豊後高田の存在に初めて気づかされた僕でも「あるある」と、笑いながら不意に頷ける内容だった。

### ◎個人賞

パクン賞は、実際に行っている地域だが、紙の触り心地からも、ゆとりのあるレイアウトからも、被写体の自然な姿からも、奥多摩の本質を感じ取れる力作だ。パンフレットをめくっていくと、いつのまにか、静かな山々に囲まれている錯覚が起きるくらい魅了された。各地のパンフレットに各地の魅力が結集されている。観光客だけでなく、地元の皆さんにも手に取って、それをもう一度確認していただきたい。

## 《マクン 委員》

### ◎総評

パンフレット大賞も7回目ということで、浸透してきたのでしょうか、過去の最優秀賞、優秀賞、各賞などを参考にしたり、意識したようなパンフレットが結構ありました。しかしただ単に参考にするのではなく、オリジナリティを加えるなどして、パンフレット作りに力を注いでいるのが伝わってきました。ゆえに、見ごたえのあるパンフレットが増え、選考も年々難しくなっています。今回、最優秀賞の豊後高田は、地元ならではの、あるあるネタを自虐的に活字にして上手く表現し、見る側を豊後高田ワールドに引き込んでくれるパンフレットでした。観光して「あるある」を体験したい。移住して「あるある」を体験したい。どちらにしても「一回行ってみたいな〜」という魅力を感じる一冊でした。

## ◎個人賞

マックン賞にした福井県の池田町の「池田町のきほん」のパンフレットを見始めるとまず目に入るのが「木」そして町の9割が森林という情報が目に飛び込んできて「きほん」の「き」は「木」というのが分かりました。池田町で生活する人々、食文化、そこに生息する動植物など、全てが「木」に繋がっていて「池田に行けば木と触れ合える。木のある生活をしたかったら池田に行けばいい」と感じる一冊でした。

小学生の子を持つ父親の個人的な意見ですが、「小学校に入学するとマイ机がもらえます」という言葉に魅かれ、そんな環境で子供を育ててみたいな～って思いました。

## 《北村 委員》

### ◎総評

どのパンフレットも、限られた予算の中でできる限りの創意と工夫に溢れており、大賞の選考プロセスは実に楽しいものとなった。印象的な写真を配置したもの、意表を突くデザインで勝負するもの、そのまま遊べるもの、香り付きのものなど力作が揃う中で、大賞を受賞した（大分県）豊後高田市の作品は、ユニークなイラストが目を引き一方で、圧倒的な情報量の少なさと満載のあるある自虐ネタという組み合わせが、とても新鮮に映った。学生選考委員の、「情報量が少なすぎて逆に自分で調べようと思いました」と言うコメントは思わずそうそうと言ってしまいそうで、そこに作者の意図があるなら脱帽するしかない。優秀賞となった松浦市の作品は、テーマの絞り込みが楽しく、写真と比較できるイラストが秀逸だった。

## ◎個人賞

センター賞となった（鹿児島県）和泊町の OKINOERABU SAIGOU GUIDE BOOK は、ただでさえ美しい海に囲まれた魅力に溢れる南の島に、これまた誰からも愛される西郷どんに纏わる歴史上の出来事を重ね合わせることで、見るものに対し一層魅力的な地域として訴えかけ、是非訪れてみたいと感じさせることに成功している。西郷どんに関しても、徒に美化することなく客観的に記述されていることも好感が持てた。